

投影描画法研究の動向

青 木 健 次

Recent Studies of Projective Drawings

Kenji Aoki

1. 描画法とは何か

描画法とは描画を用いて人格を知ろうとするもので、人格測定法のうちでは投影法に分類される。「投影」という概念は元々精神分析用語であるが、投影法の実験的研究の必要性を主張している Zubin, Eron & Schumer (1965) が概念を整理している。彼らは精神分析用語の「投影」と投影法の「投影」とを区別し、前者が自らの属性の一部を他者に帰せしむる無意識過程であるのに対し、後者は抑圧されない、意識内の、さらに理想となるような内容までも含む広い表現行為であるとした。ただし、それらの複合的な表現の中から被験者の人格に関連あるものを拾い出すことが投影法利用の重大な作業であり、投影法の最大の困難点ともなる。あいまいな刺激に対して被験者が彼自身の欲求、情動、感情、また知識などを表出する過程を投影法における「投影」と呼ぶのである。したがって、描画法とは白紙上への描画表現を頼りに被験者の *private world* を知ろうとする試みである。

一口に描画法といっても多種多様なものがある。これらを分類するのは必ずしも容易ではないが、課題の自由度と表現用具とから配列可能である。深田 (1958) は最も自由度の低いものとして幾何的図形を模写する *Bender Test* をあげ、一方の極に自由画を置いている。この間に様々の課題があり、人(男, 女), 家族, 家, 木, 自動車, 動物などといった具体的な指定もあり、それにさらに特定の限定修飾語のつくこともある。また、好きなもの, 嫌いなもの, 善のイメージ, 悪のイメージ, 火のイメージ, 水のイメージなどといった抽象的な指示も各種存在する。表現用具も様々であり、特に色彩の使用は描画法では重大な要因となる。さらに色彩でもサインペン, 色鉛筆, クレヨン, 油絵具, 泥絵具などといった色彩の鮮明さ, 混合の自由さ等が絡んでくる。この他にも用紙や実施上の手続きの違いもあり、これらに課題の自由度を加味すると無数の描画法が存在することになり、次々と新しい描画法が作り出されていくことにもなる。ここでは用紙上への描画行為を通じて被験者の人格を知ろうとするものは全て描画法と呼ぶことにする。この自由度の高さ, 応用の広さが描画法の特徴となるのだが、それだけに別宮, 青木 (1976) で扱った投影法に対する批判がとりわけ描画法にあてはまることになる。

2. 人格測定としての描画法の発達

深田 (1958) が当時までの描画に関する心理学的研究の流れを3期に分けている。I期は1885年から1926年までで、描画の発達段階が主な研究対象であった。描画は年齢とともに錯画期—図式期—写実画期—美的絵画期などと区分される段階を経て発達していくことが見いだされた。II

期は1926年の Goodenough の“絵による知能の測定”発刊に始まり1948年までで、この間には主に児童の知能を描画から測ろうとする研究が中心であった。Ⅲ期は1948年の Buck の Hous-Tree -Person (HTP), 1949年の Machover の Draw-A-Person Test (DAP) に始る性格表現としての描画研究期である。なお1949年にはドイツ語圏で Koch が Baum Test を発表しており、この第Ⅲ期の開始は一つの世界的な潮流であった。

深田 (1958) は描画法の有効性に関するいくつかの研究を review している。肯定的研究には描画による適応度判定と他の方法による判定とが相関が高かったというタイプと、ある2つの群を比較したところ解釈仮説を支持する方向で描画特徴に差があったというタイプとの2つの型がある。否定的研究にも同様に2つのタイプがある。前者の方法を blind analysis 型研究、後者を描画特徴比較型研究と呼ぶことにする。この他にも多数の発達の研究があるがここではそれらは除外する。

この小論の目的は第Ⅲ期以降の描画法研究の動向を1960年代の批判期とその後のそれを乗り越えようとする動きを中心にして論述することである。

3. 描画法と自己像に関する3つの研究

描画法の研究が進むにつれ、肯定的研究と否定的研究はそれぞれ数を増し、1960年代にはこのような研究方法への批判や描画法自体への批判が高まっていった。批判の分析に入る前に、批判期の前後で研究方向がどのように変わったかをほぼ同様の結果を出した3つの具体例で比較してみる。

1960年に Kamano (1960) は SD 法を用いて人物画と自分自身を本人に評定させた。人物画と自己像の評定には有意な相関があり、人物画は自己像を反映しており有効であると結論された。なお、人物画と自己像との関係は当時の人物画研究の主テーマの1つで、この他にも Bodwin & Bruck (1960) の人物画 self concept scale と面接者の評定との比較、Cradick (1963) の人物画と自画像との比較、Apfeldorf & Smith (1966) の人物画と本人の写真の matching 等がなされている。結論はいずれも Kamano のそれと同様で、人物画の有効性を主張している。

1975年に Schaefer (1975) が人物画に SD 法を用いて Kamano (1960) の研究を追試している。仮説は①描画者は自己と描画を同様に評定する、②評定者(臨床家)間には評定の一致がある、③投影法は人格機能の表明されない側面(undisclosed aspects)を取り扱うものだから本人の評定と臨床家の評定は食い違う、の3点であった。仮説の①と②は支持されたが、本人と臨床家の評定には正の相関が認められ、人物画は人格測定の手段とはなるが投影法としては支持できないと結論された。

1978年に Van Dyne & Crarskadon (1978) が人物画と自己像の相関を SD 法によって、Kamano や Schafer の研究を踏まえて検討している。彼らは同性と異性の2枚の描画と自己像の3つの要因(現実の自己、理想の自己、最も嫌いな自己)との関係を調べた。その結果、同性の描画と現実の自己像や理想の自己像との間には正の相関が、同性の描画と最も嫌いな自己像との間には負の相関が見出された。だが、異性の描画と自己像の3要因には何の関連もなかった。

この3つの研究を比べてみると描画法研究の姿勢の変化をよく窺うことができる。Kamano (1960) のそれが素朴な楽観論にあたるのであれば、Schaefer (1975) のそれは評定者間信頼性を

求めて研究法上の厳密化を志向している。さらに彼の第3仮説は人物画の投影法としての特有の存在理由を証明しようとしていて、ある意味で非常に意欲的なものを含んでいる。たしかに投影法では本人がそれと気づかずに表出する自己の内面を把えるのが目的なので、描画の臨床家の評定と本人の評定とにズレがあり、そのズレに意味があるならばすばらしい。しかし残念ながら、Schaeferの方法はやや乱暴である。Zubinら(1965)が述べているように、表現されたものには描画者の様々の側面が含まれている。Schaeferのやり方は、Zubinらの表現を借りれば、もみがらと穀物をまぜこぜに扱っており、描画には本人が抑圧しているもの以外も多く投影されている点を忘れていて、この点で、Van Dyneら(1978)の研究は人物画にはどのような自己像が現れやすいかを分析しているので一歩進んでいる。描画には現実の自己像と理想の自己像が投影されやすく、否定的な自己像は逆に隠されてしまう。もっとも、これらは本人が意識しているものについてのみであるから、Schaeferの方法程には根源的ではない。undisclosed aspectsを扱っているという証明はなかなか難しいのである。なお、SD法を用いて他の評定と描画の評定との相関を求めることは、大石(1975)がBaum Testでも行っており、描画表現の中に自己の何等かのものが現れていることを証明するのにかなり使われている。しかし、何等かの描画者評定と描画の評定とに相関があるというだけなら、わざわざ描画を用いなくて、始めから自己像を評定させておけば十分ということにもなる。やはり、描画法の本質的な存在理由、描画を通じることによって何が新たに得られるかを究める必要があり、今後に残された重大な課題である。

4. 描画法への批判的分析

描画法に関する研究が次々と発表されていくにつれ、多くの矛盾する結果も生じ、批判も目立ってきた。これはアメリカにおける投影法全体への反省期と軌を一にするものである(別宮、青木、1976)。批判には2つのタイプがあり、1つは描画特徴比較型の多くの研究のreviewから、その結果に矛盾が多くこの種の研究の不毛性に対してなされ、他の1つはblind analysis型研究による描画法の信頼性妥当性欠如の指摘であった。

批判的reviewにはSwenson(1957)、Handler & Reyher(1965)、Swenson(1968)、Roback(1968)などがある。その1つHandler & Reyher(1965)は51の論文を扱い、人物画の不安指標とされる21特徴を検討した。252の結果のうち、仮説を支持するもの149(59%)、支持しないもの73(29%)、逆方向で有意なもの30(12%)であった。彼らは逆方向で有意であった陰影や頭髮の塗り、消しゴムの使用、重ね書きなどは不安の低い人がていねいに描画する結果生じると解釈し、今後は健全さの指標として用いるように提案している。Handler(1967)はさらに不安指標のscoring manualを発表して各指標を段階的にスコアするよう提案し、不安を外的状況によってひき起されたものと内的な原因から生じたものとに区分する必要があるとそれが困難な課題であることを指摘した。各指標の多義性という欠陥がありながらそれを単純に2群で比較することに研究法上の欠点が存在する。消しゴムの使用という1例をとっても、何度も全面的に描き直すものとはみ出した線を一寸修正するのでは同一の解釈が下し得ないのは当然である。さらに各研究で比較されている群が微妙に異っている点もreviewという形でまとめるには大きな問題である。

blind analysis型の信頼性妥当性欠如の批判にはWhitmyre(1953)、Sherman(1958-a)、

Sherman (1958-b), Watson (1967), Cressen (1975) などがある。Watson (1967) では、正常者、妄想型分裂病者、非妄想分裂病者、器質障害者各12人が描いた人物画を、投影法の専門家4人、人物画の使用者10人、非使用者10人に判定させた。各群12人と知らせたにもかかわらず判定者間の一致は .41, 正答率 .28 で chance level 内であり、経験による差も全くなかった。彼は人物画には共通の判定基準もなく診断の役に立たない、人物画の使用は早急に再検討すべきだと主張した。また、Wanderer (1969) の人物画の妥当性欠如の指摘に対して、Hammer (1969) が方法論上の反論を加えて誌上討論をしている。Cressen (1975) の研究では常に争点となっている描画の上手下手について統制した実験を行っている。彼はまず絵の出来映えで描画を3分し、そのうちの中程度のものだけを判定者に分裂病者によるものと正常者のものとに2分させた。それでも、低い妥当性はあったが、人物画の経験者と非経験者に差がなかった。Wanderer (1969) は妥当性の否定的証拠の多い人物画をなぜそんなに好むのかと皮肉な感想を述べている。

総合的にみると review での批判は、診断によるにしろ他のテストによるにしろ、曖昧に設定された群間を比較するという研究法上の問題点を主に指摘し、blind analysis 型の研究では臨床家の判定には信頼性が欠如しておりさらに絵の出来映えに左右されて妥当性が欠如していることを衝いている。もっとも群設定の問題は診断のあり方正確さと複雑に絡みあって、臨床心理学の分野の研究では常に物議を醸している。Hammer (1969) のWanderer (1969) への反論でも、Wanderer の研究で人物画に妥当性が認められなかったのは彼の臨床群が厳密性に欠けることに一因があるとしている。描画に投影されるものが多様であり、描画の各指標が多義的であり、その上に群の設定にも困難が伴うとすれば研究結果にバラつきが生じるのは当然でさえある。

こうした批判や混乱の中で Tolor (1968) が APA の “Current status of some projective techniques” というシンポジウムで描画法についても発言している。これは描画法の利用と研究に1つの指針を与えるもので、①全体的印象の重視、②特殊で明瞭な指標に基く解釈、③描画からの連想の活用、④状況因子の解明の必要性などを指摘した。彼の “テストはその特色に関連した領域の人格力動を把えることで満足すべきであり、そのテストの特色を生かすべきである” という主張は傾聴に値しよう。たとえば、Arbit & Lakin (1959) が人物画の使用者にアンケートして、人物画は自己像の良——不良、統合度の高——低などの総合的な判断に使われ、特定の性格傾向の有無や診断の直接的決定には用いられていないと発表しているのであるから、blind analysis 型の研究で診断名にまで分類させているのは、特に3つ以上の臨床群を用いている時は、描画法利用の実情にそぐわないことになる。Hammer (1969) もこの点を指摘し、人物画だけで診断する人など一人もいないと述べている。

5. 批判に応える動き

批判に対応していくつかのそれに応えようとする動きがある。もちろん、単に2群を比較したり特定の描画特徴の有無を扱った研究もあいかわらずある。ただその数は減少しており、描画法の可能性を探る方向で新しい傾向の研究を眺めてみる。それらの動向には、研究法上の反省に関するもの、より客観的で信頼性の高い指標を求めるもの、描画法の非言語性表現性という特色をより生かそうとするものなどがある。

研究法の厳密化 Handler & Reyher (1964) が review を発表する前年に自らその問題点に

取り組んでいる。彼らは群間を比較する方法の欠点として、群設定の曖昧さ、描画力の未統制の2点を指摘した。そして、同一人の操作された stress condition 下の描画（人物、自動車）を普通の状況での描画と比較する方法を採用し、順序効果を考慮して2群(21人, 36人, 男子学生)を順序を変えて2条件下で描画させた。その結果、stress condition 下では描画の不安指標が増加し、自動車画は割合変化が少なく、女性像はやや多く、男性像は最も変化した。逆方向の有意差を示した指標もあり、これらは Handler & Reyher (1965) の review に取り上げられた。結論としては外的 stress は不安指標を増加させる、自動車は描画力を調べるのによい、3種の描画への現れ方で内的不安か外的不安かわかる、stress 下と non-stress 下の描画を比べると defence の型がわかるなどが述べられた。同様の方法は Goldstein & Rawn (1957) が人物画の攻撃性指標の検討に用いている。これらの研究では実験的厳密性を求めて場面を操作し、描画者に目的とする変数のみ変化させようと試みているが、操作の効果を検証する客観的方法がないのが欠点である。Handler ら (1964) は被験者に不安を起こさせるために、GSR 機に座らせ火花や雑音で感電の恐れがあるかのように思いこませる方法を用いた。しかし、操作がうまくいったことを客観的には示せず、被験者の不安そうな行動や発言に頼らざるを得なかった。Goldstein ら (1957) は病院勤務者39人を対象とし人物画の実験を行った。被験者を2群に分け1週間間隔で2度描画させ、2度目に1方の群に操作を加えた。その内容は実施時間を無断で遅れさせ、院長が勤務時間が延長されることになったとにせの報告を行ったのである。彼らの研究でも操作成功の証拠は被験者の不平不満の声しかなかった。その結果、歯をむき出したり、拳骨を振り上げた人物画が増えたが、筆圧は変化しなかった。単に攻撃性としなくて操作可能なものと不可能なものを考えねばならないし、どこまでが意識された表現かという問題も描画法の投影法としての存在価値と関連して重要である。Handler (1967) は内的不安と外的不安を区別する必要に触れているが、ここでも内的攻撃性と外的なそれとを区別する必要があるだろう。もっとも両者は単純に区分できるものではなくその相互作用を明らかにすることこそが最大の問題なのである。

Deren (1975) は Roback (1968) の review を引用して、精神科医の診断による群設定を批判し、家族画の妥当性を人類学的に家族内力動に差があるとされる黒人、プエルトリコ人、白人を比較して検討している。母親優位な黒人の家族画では母親が父親より大きく描かれることなどを見出し、家族画に妥当性ありとした。文化人類学的知見から家族画を評価しようとする新しい試みである。もっとも、精神科医の診断の代わりに人種差を用いることがどれ程群設定の厳密性において違っているかは若干疑問としないでもない。人種の差は外的な指標としては明らかなものであっても、心理学的な差が一義的とはとても考えられまい。

指標の再検討 描画からより有効な指標を探し出そうという試みも多い。Mazolf & Kirchner (1972) は760人の男女学生の HTP の108の指標と Sixteen Personality Factor Questionnaire の17得点との詳細な比較を行った。男女別に3672 (108×17×2) の相関係数を算出し、そのうち268は有意であった。しかし、その最大のもの値でも .20 で結論で取り上げられたのは、結局、人物画足あり唯一つであった。描画には非常に多くの指標があるが、その多くはめったに現れないか常にあるといったもので、ある一指標の有無だけから何かを読みとろうとしてもなかなか役に立たない。また、彼らは HTP の inquiry を重視すべきことを主張し、得られた結果は inquiry で用いるための仮説であると述べている。inquiry の研究は重要だが、HTP のそれは

64項目と多くその上に副項目もあり順序効果も考慮されているなど、実際に研究を行うのは相当に困難だろう。

Carlson, Quinlan, Tucker & Harrow (1973) は人物画で body image に関連する18指標を因子分析した。彼らはアメリカで人物画が非常によく使われている現状と批判をふまえ、人物画に描画力から独立した指標を探す目的で研究を行った。分裂病患者28人とその他の精神科患者31人の描画を検討し、2因子を取り出した。その1つ body disturbance(身体各部の欠如や歪み等)は絵の出来映えとは相関したが、他の如何なる心理テストとも相関しなかった。他の sexual elaboration 因子(性差の強調、陰影、胸部欠如等)は絵の出来映えとは相関せず、Rorschach Test, Object Sorting Test とは相関があり、分裂病を他の疾患から有意に弁別できた。この研究は Sherman (1958-b) の人物画性差スコアは描画力を測っているにすぎないという批判に、新しい指標群を取り出すことによって応えたことになる。Carlson らは人物画は何等かの妥当性を持つ、しかしそれは性要因で body image を測っているとはいえないと結論している。

因子分析法はこの他にも Kinetic Family Drawings (KFD) で O'Brian & Patton (1974), Meyers (1978) が用いており、KFD の action, style, symbol といった指標の客観的なスコア法の有効性が示されている。一谷 (1976) は Baum Test で SD 法からの因子分析を試みている。また、Benett (1966) は人物画の27指標と self concept Q sort scores を関連づけて Multiple correlation を計算し7指標を取り出している。このように描画と他のテストを比較して統計的手法を駆使した研究は少くない。指標を羅列するだけでなく、その間の関係を探り、より正確な指標やスコア法を得ようとする方向なのである。だが、相関係数の値にある程度の有意性は示されても、それらの値は一般に高くなく、解釈仮説は時に適中し時には正しくないという多義性を統計的数字に置き換えたにすぎないと批判することもできよう。

この他にもこれまでのいくつかの指標をまとめてスケール化したり、新しい指標を導入したりする研究がある。McLachlan & Head (1974) は人物画の器質疾患指標15項目を検討した。被験者は80人のアルコール中毒患者で、15指標と Impairment Index, Performance IQ, 臨床医の判定との相関を算出した。15指標のうち5指標(均合欠如、重要部欠如、ひどい歪み、統合不全、線の乱れ)をまとめると相関係数の値が .50 ($p < .001$) となることを見出した。John (1974) は人物画の左右の比率を計算し、正常者に比し分裂病者は対称性が劣ることを発見した。ところで、彼の研究で最も印象的な点は長さを計測して割算するという手続きで評定者間信頼性を算出している点である。彼は「客観的」な指標であることを吹聴しているが、対称性が劣る人の全てが分裂病患者ではないという多義性に対してはどう応えるつもりだろうか。そして、ここまで「客観的」な指標を求めるならば、一体何のために自由度の高い描画法を用いるのかと疑問が生じてくる。

これらの研究では批判をふまえ客観性を追求しているが、一方で診断による群設定をしている例が多く、これらの新指標や新スケールの追試はなされていない。なお、人物画における body image や性要因は重要な研究テーマで初期から扱われており、肯定的研究も否定的なものともに数多いことを付け加えておかねばなるまい。それはこれらの人格の根本にかかわる概念自体が複雑で描画と簡単には対応できないためである。同じことは樹木画 (HTP の Tree や Baum Test) における幹の傷と心的外傷の関係についても指摘できる。Zubin ら (1965) は投影法の使

用者は自分の用いるテストに応じた理論をよく作るが、それを一般の人格理論に対応させようとしないや批判している。しかし、各テストに応じた理論さえまだ不十分であると考えた方がより実情に近いであろう。「客観的」な指標が見い出されたところで何を意味しているかが不明瞭ではあまり役に立たないことはいうまでもあるまい。

描画法の特色の活用 描画法の非言語テストである特性を生かそうとしたものに、Loney (1971) の Draw-A-Car-Test がある。彼はなかなかしゃべらない子供でも自動車なら割と気楽に描くという点をこのテストの特色の1つとしている。また24項目の inquiry も用い、自動車がうまく動くか、運転は簡単か、故障していないか、すぐ修繕できるかなどと尋ねている。この描画を媒介した会話から子供は次第に治療者に溶け込んでいき、単にテストとしてでなく治療の導入としての価値も持っている。描画の特性をうまく生かした方法と高く評価できよう。Davis & Hoops (1975) が聴力障害児に HTP を実施しているのも非言語性を生かしたものである。80人の聴力障害児と80人の普通児の比較を行い、人物画の耳や口には全く差がなく、樹木画の枝を描く者が障害児では少ないことを見出した。彼らはそれを描画に対する熱心さの差と解釈している。情緒障害指標も適応群と不適応群(教師の評価で群設定)の間で比較したが差はなかった。今後の研究の方向として描画の細部の有無を検討するリスト作りはもう止めて、質的特性の客観化に進むべきだと彼らは提案している。高久、藤野(1977)も聴覚障害者に樹木画テストを実施していくつかの差を見出した。そして、不適応者の screening に樹木画が有効であると提案している。描画が screening に適していることは、この他にも高木、国吉(1965)が Baum Test を、Handler & McIntosh (1971) が人物画と Bender Gestalt Test (BG) を薦めている。Handler ら(1971)では人物画や BG の方が短時間の面接や自己評定よりも正確であることを示しており、短時間で集団でも実施可能という描画法の特徴を生かした利用法といえよう。

変法・新法の試み これまでの描画法を見なおして批判に答えようとする試みは多いがまだ十分とはいえない。そこでより適切に人格を把握するために、より特性を生かして描画法を用いるために多くの変法や新法が生み出されつつある。深田(1958)はざっと数えて20と述べたが、現在にはたしていくつあることか、断定はできないが数倍にのぼるのではないだろうか。最近発表されたものを列挙すると、内的な身体像を測ろうとする Offord & Aponte (1967) の Inside-of-the-body, Loney(1971) の Draw-A-Car-Test, Burns & Kaufman(1970, 1972) の Kinetic Family Drawings (KFD), Sander & Reyher (1972) の Nude Figure Drawings, Vernis, Lichtenberg & Henrich (1974) Draw A Person in the rain などがある。Burns ら(1970, 72) の KFD は従来の家族画に動きを加えることで家族成員間の力動的関係を把握することを目的としている。KFD の客観的スコア法の研究があることは既に述べた。Sander ら(1972) の Nude Figure Drawings では裸体画の方が GSR を指標にしてより不安が生じやすいことを指摘し、性適応を測るのによいという。Vernis ら(1974) の DAP in the rain では雨が stress を象徴するので、雨の降り方とそれへの防護策とで描画者が感じている stress 量と適応力が判別できるという。日本においても中井(1970, 1971, 1974-a, 1974-b) の風景構成法やなぐり描き法や HTP の枠づけ法など、細木、中井ら(1971)の多面的 HTP 法、後藤(1975)の Baum-C や Baum-S, 丸野、徳田ら(1975)の synthetic HTP 法など様々のものが次々と発表されている。これまでの描画法では把え得なかった側面に迫るための工夫がこのような変法、新法を

生んできたのである。一般にこれらの新描画法では以前のものよりもより限定された、しかしより明瞭な概念規定を行っている点に特色がある。だが、しばしばより描画力を要求するようになっているものもあり、時間もより長くかかるものもあって、適用範囲は限られるかもしれない。

もともとは鉛筆画であった描画法に色彩を導入する試みもかなり早くから行われている。Jolles (1957) の HTP, Koppitz (1965) の人物画, Fodor & Kendel (1966) の Baum Test の色彩化があり、その後も研究が発表されている。Fodor ら (1966) によると色彩画はより情動を刺激するので、鉛筆画と色彩画を比較することで人格構造の情動的側面を知ることができるという。色彩と情動の関係は古くから心理学の対象であり、ストループテスト、色彩ピラミッド、ルッシャーテスト、ロールシャッハテストなどの多くの色彩を加味したテストがあるが、一筋縄でいくものではない。色彩を導入することで自由度はより高くなり、解釈はより複雑にならざるをえない。しかし、人間が色彩のある世界に住み、情動は人間の人格の最も重要な構成要素なのであるから、どれ程複雑困難であれ色彩要因の研究は不可欠であろう。

日本における変法の発達には主に精神分裂病者を対象とした絵画療法の経験の中から、“究極には事実上すべての(傍点中井)分裂病者に何等かの精神療法的接近をすること(中井, 1973-a)”を目的として、“少しずつ変更されている描画空間内に投映された HTP の多面的な情報から被験者の適応の状態を探ろう(細木ら, 1971)”として育てられてきた。また、描画を通じていくらかの会話を行うことも試みられている(中井; 1974-b, 後藤; 1975)。後藤(1975)の Baum-C や Baum-S も精神病院での実践の中から、普通の教示では描画ができない被験者や標準型のバウム画が描けない被験者に、ロールシャッハテストの限界検査のようなやり方で、一定の指示やお手本を与えて障害の深さを探ろうとしている。

中井の枠づけ法は用紙空間の構造的なことからとりわけ興味深い。彼が最初にその技法を用いた時、“しかし、今枠の中に現れたものはいままで彼が決して示したことのない世界であった(中井, 1974-b)”ので強い感動を生じさせた。枠づけ法によってより内面的な、隠された欲求や志向、幻想や内実が露呈し、通常法ではより外面的、防衛的、虚栄の結果となるという。用紙の縁に沿ってサインペンでテスターによって描かれたたった1本の線が被験者の描画表現を大きく変容させる。描画表現の奥深さ、描画法の可能性を示す適例と考えられる。絵画療法での描画の扱いは主眼を治療において自由画がよく用いられるが、治療過程を1つの流れとして把える上で、課題画の変化が重要な支点を与えている。状態像の変化が敏感に描画の中に反映してくるし、時には明瞭に変化を先取りもするからである。また、丸野ら(1975)は synthetic HTP を反復描画させイメージの意図の変換を求め治療的役割を果させている。つまり、描画はその表出性によって治療的効果を持ちうるし、また投影法としての観点からは反復可能という大きな利点を持っている。

山中(1976)は精神分裂病約の Baum Test を検討して、漏戸状幹上開、“メビウスの環現象”から精神分裂病を“空間の病”として考察している。一方、高江洲(1975)、高江洲ら(1977)は精神分裂病者は人物、特に複数の人物を描くことに特有の困難さを示すことを手掛りに、“間合いの病”として分裂病を把えて集団絵画療法の中にその知見を活用している。このように描画においてはじめて示される特有な表現からその描画者の状態像を精神病理学的に把え、さらにそれを治療に生かしていくのは描画の利用の可能性の深さを示すものであろう。ただ、絵

画療法における描画法は治療過程を縦断的に把握することに重点が置かれているために、個々の症例はきわめて味わい深い、十分に比較可能なものとは現在の時点では言い難い。

さて、HTP、人物画、Baum Test などそれが発表された時点では新法であったわけで、それぞれ明瞭な解釈体系を持っていた。それが様々の検証に洗われて、多くの批判を受けることにもなっていた。次々と発表される変法や新法でも測ろうとする対象が複雑な構造を持った人間であり、さらには客観的な評価が困難な深層をも扱おうとしていることを忘れてはなるまい。客観的な正確さのみを求めるあまり概念を平板化してしまっただけでは本末転倒もはなはだしい。1枚の描画には人間の様々の層が現れうるが、それがいつでもどの被験者においても投影されるというものでもなく、すべての層が一度に表現されるというものでもない。描画法の長所と短所を明らかにし、それらを十分踏まえた研究がこれから続けられることによってこれらの新法の評価が次第に決っていくだろう。

6. 残された問題

描画法の投影的側面 描画の中には本人が意識しているものも意識していないものも様々に含まれていることは既に述べた。もし、全てが意識されており言語表現が可能であるならば、描画法の役割は非常に限定されたものとなろう。したがって最も根本的な問題はどこまでが描画者によって意識された描画かということである。投影法は人格の本人には意識されない、つまり抑圧された部分だけを扱うのではなく、意識されない部分も扱うのである。Schaefer (1975) の結論はここで思い違いをしていた。だが意識された部分と意識されない部分を分けるのは非常に複雑で厄介な問題である。中井 (1974-a) は精神病患者への非言語的接近法を投影的方法と構成的方法とに分類した。彼は“構成”が“投影”に比してより意識的という印象があるのは、一つには、選択対象が一般に前ゲシュタルト的であるよりはかなり明確なゲシュタルトであることにより、いま一つには、シンタグマティックな選択過程がより意識的な比較考量に傾くことによるのであろう。また一般に未来志向的な傾向を持つ”という。描画がきわめて意識的な行為である点において異論はないであろう。しかし、意識的な行為を決定づけるあらゆる要因が意識的であるとは限らないし、描画においてはイメージが先行する。ここに、描画における“構成”過程と“投影”過程との複合性とその区分が重要な問題となってくる。心的世界においてイメージは独立して存在しているわけではなく、中井の用語を借りれば、明確なゲシュタルトを対象として選択する過程には、心的世界の前ゲシュタルトの雲の中から相互排他的に1つのゲシュタルトを取り出す過程が存在する。投影法としての描画法は用紙上に表現された明確なゲシュタルトから逆上って、心的世界の前ゲシュタルトの雲の中に何等かの構造的性を見出そうとするものである。別の表現をすれば、心的世界の中から、イメージタンクの中からサンプリングした1つのイメージを媒介にして、イメージ全体の状態像を探ろうとする (藤国, 吉川; 1971, 藤岡; 1974) ものである。用紙上に選ばれたゲシュタルトやイメージを再現する行為が意識的であり、対象を選択する過程がかなり意識的なものであっても、それらの対象を心的世界に備蓄していく過程、また何等かの変形を受けつつ貯蔵されている過程は相当に意識されないものであろう。また、表現様式を選択する過程が意識的であるとしても、人は自由にあらゆる表現様式をとりうるものでもない。そして、意識的であるといってもその意味が全て本人に了解されているわけでもない。描画

者が対象選択も含めて意識的にどれだけ多様な表現を行えるのか、またその意味をどれだけ言語表現可能な程度にまで意識しているかを探ることが重要であると思われる。もし、描画者が表現しようとして意識している以上のものまで、描画を見る者が読み取ることができたならば、その時こそ描画法は *undisclosed aspects* をも取り扱っていると主張できるだろう。

状況因子の介入しやすさ これは Tolor (1968) の指摘していることであるが十分な研究がない。検査場面の雰囲気は描画者に大きな影響を与える。Handler ら (1964) の研究で普通状況の方が *stress condition* 下よりも描画がいていねいであったのは、被験者があやしげな *stress condition* を早くのがれようと簡略な描画を行った結果であると考えられる面が多い。被験者は自分の描画が他人からどう見られるかを心配しつつ、テスト場面のあらゆる状況を感じ取りつつ自分の可能な範囲で表現様式を変えてしまう。そして、簡略な表現をとるか丁寧な描写をするかで描画は大きく変わってしまうという欠点がある。数秒で描かれる絵文字のようなものもあるし、時間をかけた写実的なものも、人目をひどく意識した戯画的表現もある。しかも、1人の人が描画場面によって相当変わった表現が可能なのでまことに扱い難い。状況因子といっても、山中 (1973) が双生児法で検討したような環境規定か素質規定かという問題と、青木 (1975) や河田 (1976) が再検査信頼性の検討で一部の描画指標の信頼性の欠如として示したものは、重なり合うことがあって複雑なのだが、本質的に異なっている。ここで状況因子と呼ぶのは場面によって短期間で変化してしまうような後者が問題である。描画の変化しやすさは特徴の一つとして利用もするが、変化しやすい部分と変わり難い部分を分類していく作業が重要なのである。

検査者効果も Cassel, Johnson & Burns (1958) が HTP でテスターがいる場合といない場合を比較し、テスターがいると描画が小さく簡略になることを見出しているし、Datta & Drake (1968) が人物画で少女はテスターが女性だとより女性を描くことを示している。検査場面の要因の中で検査者効果は重要なものであるのにまだ研究が不十分である。場面の暖かさ冷たさといった質的要因の解明も困難ではあるが、描画法もまた对人的表現行為の1つなのだから、是非研究が必要であろう。状況因子の観点からは、実験的に場面を操作する研究方法も内的な要因と外的な要因の絡み合いを探り、概念を充実させていく上で不可欠のものである。ただし、たとえば不安という一語とある描画特徴を単純に結びつけるような研究方法では人間という複雑な存在は決して把えきれない。描画はその複雑な存在にある方向から光を当てて2次元に置き換えたものであり、状況因子とはその妨害要因の最たるものであるから、時には特定の刺激を与えてより深層を探る可能性もあり、解明の努力はいくらなされても十分すぎることはない。

Inquiry など 描画法利用の困難さは表現されたものが描画者にとってどのような意味を持つかを把える方法に関連している。たとえば、山野 (1973) が奇をてらった戯画的表現と変形した描画の区別を述べているが、簡単な描画でも丁寧な描画でも、そのようにしか表現しえない場合とそのようなも表現しうる場合とでは解釈に大差が生じるのは当然であろう。inquiry ではしばしばこの点を明らかにすることができるので重要である。どのような意図で表現されたかを知ることなしでは解釈が非常に限られてしまうのは当然であろう。しかし、inquiry を次々と増やしていけば取り出される情報は増えるが、他との比較が困難になってしまうし、非言語性という描画法の利点を損ってしまうことにもなる。さらに反復使用に影響を与えるし、集団に短時間で実施しようという点にも反している。Davis ら (1975) のいう質的特性の客観化とは、inquiry と

いう言語表現を介さずして、描画者の態度を知ろうとする試みでもある。意図によって描画が大きく変るのは描画の特徴であり、治療への活用もそれあればこそであるから、描画の中に描画者の意図や態度を読み取る手掛りを見い出すことは非常に望ましい。もっとも、可能な場合は描画者による若干の説明は求めるべきで、言葉によって語られたものと実際の描画とに不一致があればそれこそ重要な解釈対象となるのであるから、inquiry の研究と質的特性の研究は同時に進めなければならない。だが、inquiry の結果を範疇化するのはなかなか困難であるし、質的な特性は数量的に扱い難いが故に質的特性として取り残されてきた。これまで積み重ねられてきた知識、多くの解釈指標、あるいはそれらから構成される様々のスケール、より新しい量的接近法などを支点とするのでなければ、inquiry の試みも質的特性把握の試みも妙に偏ったものになってしまうであろう。変法新法の開発もこれらの積年の諸研究、あるいは他の投影諸技法や人格測定法、また表現理論人格理論の深い掘り下げがなかったならば一人よがりのものと終ってしまうであろう。最も理想的な方法を挙げるならば、描画という1つの人間の行為に対して、これらのあらゆる方向から適切な接近がなされなければならない。これは全く至難な業ではある。せめて至難な業からこそ豊かな収穫が得られることを期待するとしてしよう。

引用文献

- 青木健次 1975 絵画法の再検査信頼性——パウムテストを用いて——日本心理学会第39回大会発表論文集457。
- Apfeldolf, M. & Smith, W. J., 1966 The representation of the body self in human figure drawings. *Journal of projective techniques & personality assessment*, 30, 283-289.
- Arbit, J. & Lakin, M., 1959 Clinical psychologists' diagnostic utilization of human figure drawing. *Journal of Clinical Psychology*, 15, 325-327.
- Bennet, V. D. C., 1966 Combination of figure drawing characteristics related to the drawer's self concept. *Journal of Projective Techniques*, 30, 192-196.
- 別宮哲, 青木健次 1976 投影諸技法の危機と今後の課題 ロールシャッハ研究 XVⅢ, 121-138。
- Bodwin, R. F. & Bruck, M., 1960 The adaptation and validation of the draw-a-person test as a measure of self concept. *Journal of Clinical Psychology*, 16, 427-429.
- Buck, J. N., 1948 The H-T-P test. *Journal of Clinical Psychology*, 4, 151-159.
- Buck, J. N., 1948 The H-T-P technique; a qualitative and quantitative scoring manual. *Journal of Clinical Psychology*, 4, Monograph Supplement 5.
- Burns, R. C. & Kaufman, S. H., 1970 Kinetic Family Drawings (K-F-D) An introduction to understanding children through kinetic drawings. Brunner/Mazel, New York.
- Burns, R. C. & Kaufman, S. H., 1972 Actions, styles and symbols in kinetic family drawings (K-F-D): An interpretative manual. Brunner/Mazel, New York.
- Carlson, K., Quinlan, D., Tucker, G. & Harrow, M., 1973 Body disturbance and sexual elaboration factors in figure drawings of schizophrenic patients. *Journal of Personality Assessment*, 37, 56-63.
- Cassel, R. H., Johnson, A. P. & Burns, W. H., 1958 Examiner, ego defense, and the H-T-P test. *Journal of Clinical Psychology*, 14, 157-160.
- Craddick, R. A., 1963 The self image in the Draw-A-Person test and Self-Portrait-Drawings. *Journal of Projective Techniques*, 27, 288-291.
- Cressen, R., 1975 Artistic quality of drawings and judges evaluations of the DAP. *Journal of Personality Assessment*, 39, 132-137.
- Datta, L. & Drake, A. K., 1968 Examiner sex and sexual differentiation in preschool children's

- figure drawings. *Journal of Projective Techniques & Personality Assessment*, 32, 397-399.
- Davis, C. J. & Hoopes, J. L., 1975 Comparison of House-Tree-Person Drawings of young deaf and hearing children. *Journal of Personality Assessment*, 39, 28-33.
- Deren, S., 1975 An empirical evaluation of the validity of the Draw-a-Family test. *Journal of Clinical Psychology*, 31, 542-546.
- Fodor, V. S. & Kendel, K., 1966 Vergleichende Beobachtungen von schwarzen und farbigen Baumzeichnungen bei psychotischen Patienten. *Schweiz Archiv für Neurologie, Neurochirurgie und Psychiatrie*, 97, 2, 361-386.
- 藤岡喜愛 1974 イメージと人間——精神人類学の視野—— 日本放送出版会
- 藤岡喜愛, 吉川公雄 1971 人類学的に見た, バウムによるイメージの表現 季刊人類学 2-3, pp.3-28。
- 深田尚彦 1958 心理臨床における描画テスト法——特に Family Drawing Test—— 心理学研究, 29, 117-123。
- Goldstein, A. P. & Rawn, M. S., 1957 The validity of interpretive signs of aggression in the drawing of the human figure. *Journal of Clinical Psychology*, 13, 169-171.
- 後藤佳珠 1975 臨床場面に適用した“Baum Test”(1) 新しい技法“Baum-C”“Baum-S”を加えて, 芸術療法, 6, 53-59。
- Hammer, E. F., 1969 DAP: Back against the wall? *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 33, 2, 151-156.
- Handler., 1967 Anxiety indexes in the draw a person test; a scoring manual. *Journal of Projective Techniques & Personality Assessment*, 31, 46-57.
- Handler, L. & Reyher, J., 1964 The effects of stress on the draw-a-person test. *Journal of Consulting Psychology*, 28, 259-264.
- Handler, L. & Reyher, J., 1965 Figure drawing anxiety indexes: A review of the literature. *Journal of Projective Techniques & Personality assessment*, 29, 305-313.
- Handler, L. & McIntosh, J., 1971 Predicting aggression and withdrawal in children with the draw-a-person and Bender gestalt. *Journal of Personality Assessment*, 35, 331-335.
- 細木照敏, 中井久夫他 1971 多面的H T P法の試み 芸術療法, 3, 61-67。
- 一谷壘 1976 SD法によるバウムテストの因子分析的研究 日本心理学会第40会大会発表論文集, 913-914。
- John, K. B., 1974 Variations in bilateral symmetry of human figure drawings associated with two levels of adjustment. *Journal of Clinical Psychology*, 30, 401-404.
- Jolles, I., 1957 Some advances in interpretation of the chromatic phase of the H-T-P. *Journal of Clinical Psychology* 13, 81-83.
- Kamano, D. K., 1960 An investigation on the meaning of human figure drawing. *Journal of Clinical Psychology*, 16, 429-430.
- 河田祐子 1976 家族画の信頼性に関する一研究 日本心理学会第40回大会発表論文集, 907-908。
- Koppitz, E. M., 1965 A comparison of pencil and crayon drawings of young children. *Journal of Clinical Psychology*, 21, 191-194.
- Loney, J., 1971 Clinical aspects of the Loney Draw-A-Car test: Enuresis and encopresis. *Journal of Personality Assessment*, 35, 265-274
- 丸野広, 徳田良仁他 1975 破爪病心像世界へのイメージ絵画精神療法的接近, 芸術療法, 6, 32-37。
- Marzolf, S. S. & Kirchner, J. H., 1972 House-Tree-Person drawings and personality traits. *Journal of Personality Assessment*, 36, 148-165.
- McLachlan, J. F. C. & Head, V. B., 1974 An impairment rating scale for human figure drawings. *Journal of Clinical Psychology*, 30, 405-407.
- Meyers, D. V., 1978 Toward an objective evaluation procedure of the Kinetic Family Drawings

- (KFD). *Journal of Personality Assessment*, 42, 4, 358-365.
- 中井久夫 1970 精神分裂病者の精神療法における描画の使用——とくに技法の開発によって得られた知見について—— 芸術療法, 2, 77-90。
- 中井久夫 1971 描画をとおしてみた精神障害者 とくに精神分裂病者における心理的空間の構造 芸術療法, 3, 37-51。
- 中井久夫 1974-a 精神分裂病状態からの寛解過程——描画を併用せる精神療法をとおしてみた縦断的観察——, 宮本忠雄編 分裂病の精神病理 2, 東京大学出版会
- 中井久夫 1974-b 枠づけ法覚え書 芸術療法, 5, 15-19。
- O'Brien, R. & Patton, W., 1974 Development of an objective scoring method for the Kinetic Family Drawing. *Journal of Personality Assessment*, 38, 156-164.
- Offord, D. R. & Aponte, J. F., 1967 A comparison of drawings and sentence completion responses of congenital heart children with normal children. *Journal of Projective Techniques & Personality Assessment*, 31, 2, 57-62.
- 大石勝代 1975 Der Baumtest における自己概念 日本心理学会第39回大会発表論文集, 456。
- Roback, H., 1968 Human figure drawings: Their utility in the clinical psychologist's armamentarium for personality assessment. *Psychological Bulltein*, 70, 1-19.
- Sanders, R. S. & Reyher, J., 1972 The clinical applicability of nude figure drawings. *Journal of Personality assessment*, 36, 254-262.
- Schaefer, W., 1975 The relationship between self-concept and the draw-a-person test. *Journal of Clinical Psychology*, 31, 135-136.
- Sherman, L. J., 1958-a Sexual differentiation or artistic ability? *Journal of Clinical Psychology*, 14, 170-171.
- Sherman, L. J., 1958-b The influence of artistic quality on judgements of patient and non-patient status from human figure drawings. *Journal of Projective Techniques*, 22, 338-340.
- Swenson, C., 1957 An empirical evaluation of human figure drawings. *Psychological Bulltein*, 54, 431-466.
- Swenson, C., 1968 Empirical evaluations of human figure drawings, 1957-1966. *Psychological Bulltein*, 70, 20-44.
- 高江洲義英 1975 慢性分裂病者の人物画と「間合」 芸術療法 6, 16-21。
- 高江洲義英, 高江洲田鶴子, 吉田正子, 田分京子, 橋本宏子 1977 慢性分裂病者への絵画療法の場における「間合い」 芸術療法, 8, 7-16。
- 高木隆郎, 国吉政一 1965 中学校における集団精神衛生検査の経験 児童精神医学とその近接領域, '6, 28-29。
- 高久信一, 藤野信行 1977 聴覚障害者の樹木画テストに関する一考察 日本心理学会第41回大会発表論文集 1016-1017。
- Tolor, A., 1968 The graphmotor Techniques. *Journal of Projective Techniques & Personality Assessment*, 32, 222-228.
- Van Dyne, W. T. & Carskadon, T. G., 1978 Relationships among three components of self-concept and same-sex and opposite-sex human figure drawings. *Journal of Clinical Psychology*, 34, 537-538.
- Verinis, J. S., Lichtenberg, E. F. & Henrich, L., 1974 The draw-a-person in the rain technique: its relationship to diagnostic category and other personality indicators. *Journal of Clinical Psychology*, 30, 406-414.
- Wanderer, Z. W., 1969 Validity of clinical judgements based on Human Figure Drawings. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 33, 2, 143-150.
- Watson, C. G., 1967 Interjudge agreement of draw-a-person diagnostic impressions. *Journal of Projective Techniques & Personality Assessment*, 31, 42-45.

京都大学教育学部紀要 XXV

- Whitmyre, J. W., 1953 The significance of artistic excellence in the judgement of adjustment inferred from Human Figure Drawings. *Journal of Consulting Psychology*, 17, 421-424.
- 山中康裕 1973 双生児による基礎的研究 林・一谷編著 バウムテストの臨床的研究, pp.1—26, 日本文化科学社。
- 山中康裕 1976 精神分裂病におけるバウムテストの研究 *心理測定ジャーナル*, 12, 4, 18—23, 日本心理適性研究所
- 山野保 1973 変形した樹木画描写の心理 林・一谷編著, バウムテストの臨床的研究, pp.163—197, 日本文化科学社。
- Zubin, J., Eron, L. D. & Schumer, F., 1965 *An experimental approach to projective techniques.* John Wiley & Sons, Inc., New York•London•Sydney.